

# 夏目漱石に関する基礎的研究

The Fundamental Study of SOSEKI NATSUME

村 田 好 哉

Yoshiya MURATA

毎年発表されている日本近代文学関係の研究論文は夥しい数にのぼる。澤井清の調査によると1971年から90年までの20年間において研究論文の総数は41879件にも及び、そのうち夏目漱石が2221件、森鷗外が1560件、島崎藤村659件であることが報告されている。日本近代文学の論文は年間約2000本にも及び、そのうち鷗外が80本、藤村が30本前後となるわけだが、近代文学関係で最も論文が多い漱石の場合となると控え目に見積っても毎年ほぼ100本見当の論文が発表されていることになる。程度の差こそあれ漱石を始め、鷗外・芥川龍之介・宮沢賢治といった特定作家への論文の集中は相変わらず続いているし、発表媒体の多様化や学際的研究の隆盛とも相まって日本近代文学関係の情報量は、90年代以降飛躍的に高まっているのである。

西洋の衝撃のなかにあつて日本近代を生きた夏目漱石の人と文学とを巡る研究は学際的な成果を取り入れつつ現在めざましい進展を見せている。夥しい先行論文の洪水のなかにも身を置きつつ、いかにして漱石とかかわりながら自己の研究方法を確立してゆくのか。漱石研究に携わる多くの者が直面する問題であろう。膨大な論文、資料といった情報を効率よく収集し、研究の現状を正確に捉えた上でいかに自己の課題を発見するのか。研究資料を有効に活用しながら課題解明にとっての最適な方法を身につけ、さらに実践する能力を養うことがこれまで以上に求められている。

漱石研究文献目録の作成や資料収集は、研究史を跡付け、漱石研究の現段階を正確に捉えるための基礎作業にあたると言えるであろう。また自己の論理を先行文献との対話によりながら組み立て、より精緻なものとして展開するための重要なプロセスの一つでもある。研究文献の数が膨大であるからといって既成の文献解題や研究史の評価を安易に肯い、その作業を怠るのであれば、論文は対話の精神に欠け、恣意性に満ちたものとなるであろう。このため独善的との誘いを免れないのである。長い年月のなかで多くの研究者によって様々に論じられてきた作品を今改めて取り上げることの意味は、研究者個人の内面から発した問題意識の切実さとそれを支える基礎作業の着実な積み重ねが相まってこそ初めて明らかになるものなのである。